

北大史学会会報

史筵 22

2024.12.4

彙報

◎ 二〇二四年度大会（二〇二四年七月二〇日）

【研究報告】

佐藤 拓海（大学院文学院・修士課程・日本史学研究室）

「室町幕府・鎌倉府間の境界地域における越後守護上

杉氏の位置づけ―15世紀中葉を中心に―」

上田 哲司（アイヌ・先住民研究センター博士研究員）

「松前藩における將軍印判状の保管と幕末の政局」

彦山 明志（大学院文学院・博士後期課程・東洋史学研究室）

「漢人世侯と投下領主の消長―モンゴル帝国期の済寧

路を例に―」

長谷川賢太朗（大学院文学院・修士課程・西洋史学研究室）

「戦後イギリスにおけるヒストリー・ワークショップ

の歴史実践」

【講演】

小杉 康（考古学研究室・教授）

「きわめて私的な日本の考古学史」

砂田 徹（西洋史学研究室・教授）

「内戦の発明と共和政ローマ人の「苦惱」―D・アーミテージ
『内戦』の世界史』に寄せて―」

◎ 二〇二四年度総会（二〇二四年七月二〇日）

大会に引き続き開催された総会で、北大史学会の委員・会計監
査が以下のように選出されました。

〔委員〕 川口晁弘（日本史学教員）、吉田拓矢（日本史学教

員）、吉開将人（東洋史学教員）、村田勝幸（西洋史学

教員）、松寫明男（西洋史学教員）、高瀬克範（考古学

教員）、佐藤拓海（日本史学院生）、長谷川賢太朗（西

洋史学院生）、彦山明志（東洋史学院生）、松浦愛理

（考古学院生）

〔会計監査〕 長谷川貴彦（西洋史学教員）

次に二〇二三年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認されま
した。

I 収入の部

（内訳）

前年度繰越金

一、四七二、七七五円

二〇二三年度収入

四〇三、〇〇六円

《細目》

会費

三九〇、〇〇〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

会誌販売代金

八、〇〇〇円

銀行口座利息

六円

合計

一、八七五、七八一円

II 支出の部

(内訳)

二〇二三年度支出

三三〇、五四二円

《細目》

『北大史学』六三号・『史筵』二二号・角5封筒

(印刷代(含抜刷代) および振込手数料)

二八七、七三八円

郵送費(『北大史学』・会費請求書等)

一九、八二三円

交通費(『北大史学』発送時のタクシー代)

二、三〇〇円

ホームページ用サーバーレンタル料

九、四八八円

事務費用(のり、長3封筒)

一、一九三円

次年度繰越金

一、五五五、二三九円

合計

一、八七五、七八一円

◎ 二〇二三年度卒業論文・修士論文発表会

(二〇二四年二月二八日)

コロナウイルス感染防止のため、オンライン形式(Zoom)で開催されました。

【卒業論文発表】

福島 亘(日本史学)「十九世紀末日本における「君が代」と「国歌」の性格」

梅津 尚生(東洋史学)「16世紀マラケシュのモリスコとサアド朝王権—シャイフームハンマド・アル・アンダルスィーに

対する王権の眼差し—」

長谷川賢太朗(西洋史学)「ヒストリー・ワークシヨップ運動と

1970年代イギリス社会」

【修士論文発表】

池崎 修平(日本史学)「明治前期札幌における官営工場の雇用と労働」

小島 一記(東洋史学)「州制下オスマン帝国における警察行政—ドナウ州及びボスニア州での展開と構造—」

加藤 貴光(西洋史学)「フランス革命期ドイツにおける帝国国法論者の帝国観—ハーベルリンとベルレプシュ事件—」

◎ 二〇二三年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

●博士論文

木村 由美「樺太からの引揚者と戦後北海道」

野口飛香留「南北朝期官人陰陽師の研究」(二〇二四年九月修了)

●修士論文

石井 祐実「アイヌ民族が所持したクワサキについて」

田原 洋朗「合同漁業株式会社(一九三二—一九四八年)の研究」

池崎 修平「明治前期札幌における官営工場の雇用と労働」

浦 果「満洲国」建國大学における学生の塾生活と民族協和」

●学士論文

高田 壮輔「不常典と皇位継承の論理」

勝田 涼斗「山城国—揆の歴史的意義」

木下 智彦「地頭請の成立」

小澤 一平「足利義政期における興福寺の対幕府交渉の再検討」

佐藤 琴乃「戦時日本の女子徴用問題」

上田 陽登「上川離宮計画と第七師団の旭川移転」

紙井 健人「1920年代から1930年代の日本におけるカフェ」

と女給」

遊馬 考輝「末次信正とポピュリズム」

原田 拓夢「翼賛選挙と旧政党内」

鳥倉 菜緒「『東行漫筆』から見る第一次幕領期における蝦夷地の

社会」

鈴木 陽彦「蝦夷地二件」と幕府の蝦夷地政策」

鈴木沙和子「井原西鶴『男色大鑑』における男色観の検討と考察」

内海 静恵「加賀藩における誕生墓目」

福島 亘「19世紀末日本における『君が代』と『国歌』の性格」

平野 良「軍人恩給と占領期日本政府」

奥田 祐也「戦後経済界の公職追放と企業経営者」

山本 彩乃「樺太における緊急疎開の制度的研究」

【東洋史学研究室】

●博士論文

坂東 泰「清末新政期の鴉片政策と中央・省関係―政策評価の問

題を中心として」(二〇二四年九月修了)

●修士論文

小島 一記「州制下オスマン帝国における警察行政…ドナウ州及び

ボスニア州での展開と構造」

中川 流衣「イブン・アル・アフタスは「旧」・「土着」ベルベルの

指導者であるか―11世紀アンダラスのフィトナ初期に

おけるズンヌーン家、ラジーン家との比較から」

新谷耕太郎「人丁から民数へ―18世紀清朝における人口の発見」

伊藤 大智「晋書」における徴召と辟召について」

●学士論文

梅津 尚生「16世紀マラケシュのモリスコとサアド朝王権―シヤイ

フィルムハンマド・アル・アンダルスィーに対する王権
の眼差し」

地紙慎太郎「中世アラブ世界の鷹書―クシャージムの『畏と狩りの
書』を中心に―」

甲斐 瑛大「古代エジプト古王国後半から第一中間期における時代
の転換について―気候変動から見る古王国崩壊に関する
考察―」

曲里 皓右「8世紀の東ウイグル帝国によるマニ教導人についての
研究」

米田 千種「秦始皇帝の巡行についての再検討」

【西洋史学研究室】

●修士論文

青海 一太「12世紀オークニー諸島を取り巻く海域世界」

加藤 貴光「フランス革命期ドイツにおける帝国国法論者の帝国観
―ヘーベルリンとベルレブシユ事件―」

志村 佳亮「帝国前期におけるローマ兵の結婚とローマ当局の反応
―結婚禁止令を手がかりに―」

高木 暉馬「18―19世紀フランスにおける民衆の婚姻・家族の
変遷」

濱寄 隼佑「14世紀ベームン王冠諸邦の統合における聖ヴァーツ
ラフの機能」

●学士論文

赤木 隆政「中世ポロニア大学の変遷とnatioの役割」

上田 昂伸「15世紀におけるハンザ同盟の変容」

加藤穂乃花「中世盛期のポーランドにおける居酒屋と都市成立の関
係―東方植民期の居酒屋の変容と建設都市―」

上坂 麟子「冷戦期アメリカの「理想の家族」に見るジェンダー的
反動」

倉品 智行「ロナルド・サイム「ローマ革命」論の批判的考察―前
一世紀におけるイタリア地方都市有力者層の実像から
―」

小杉山恵理子「一七世紀から一九世紀フランスにおける「アパラン
ス」について」

柴田亜莉紗「一六世紀ヴェネツィアの政治と「都市の刷新（ren
ovatio urbis）」について」

下田 雄人「古代ローマ人の死生観―墓のコーメモレーションを通
して―」

田所 大貴「一九世紀中頃までにハイチ革命が大西洋世界に与えた
影響」

中村 鉄人「第一次世界大戦前後のインドナショナリズム」
（二〇二四年九月卒業）

西尾 峻「共和政末期のローマにおける権力闘争とセクストゥ
ス・ポンペイウスのイメージ戦略」

長谷川賢太郎「ヒストリー・ワークシヨップ運動と一九七〇年代イ
ギリス社会」

羽深亜優実「第一次世界大戦におけるアメリカ政府広報委員会の
活動とその影響」

藤田 雅也「現代ヒップホップにおけるLil Nas Xの挑戦」

【考古学研究室】

●博士論文

許 開軒「近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究」

●修士論文

荒井 綺乃「ZooMSを用いた遺跡出土アシカ科遺存体の種同定
の試み」

越崎 聖也「道央部の縄文中期、後期の地域社会についての研究」
●学士論文

伊藤 優那「擦文文化期の北海道及び古代東北北部における穀物利
用」

垣内 聖人「K39遺跡の北大式土器について―工学部共用実験研
究棟地点出土資料の再検討を中心に―」

佐藤 朱莉「北海道湧別市川遺跡出土石器の使用痕分析」
山崎 凱士「江別太遺跡の形成過程と続縄文期の土器群構成につい
て」

◎ 研究室便り

＜日本史学研究室＞

異動があった。白木沢旭兎先生が二〇二四年三月を以て退職され
た。先生はながく日本史学研究室の中心だった。大学院文学研究科
長・文学部長もお勤めだったから、それこそ北大文学部の中心でも
あった。これからは、思案に困る問題が生じてても、先生の名案に頼
ることは出来ない。残る者だけで対処せねばならない。嘆いても詮
ない。いつか来る日が来てしまったのだ。先生が去った日本史学研
究室は、教授四名、講師一名、という構成である。

新二年生は、一〇月一日現在、一三名である。その二年生を対象
とした研修旅行で、九月初旬に広島県を訪れた。参加者は八名、引
率は講師の吉田拓矢である。観光名所でもある広島城、厳島神社、
大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）のほか、昭和初期に毒ガ
ス工場があった大久野島、県北部の三次盆地に位置する浄楽寺・七

ツ塚古墳群、そして戦国大名毛利氏の居城であった郡山城跡と、県内各地の史跡にも足を延ばし、見聞を深めた。

川口ゼミが学部と大学院とそれぞれに夏季合宿を実施した。学部ゼミ合宿は八月二日、三日の一泊二日、参加者は学生四名と少なかったが、藤田省三『天皇制国家の支配原理』と温泉を満喫した。大学院ゼミ合宿は九月二三―二五日の二泊三日で、場所は登別温泉である。二〇一九年以来的のことだから、コロナ禍以後、初めての大学院ゼミ合宿である。夏季休業中の研究成果の報告があった。登別温泉の温浴効果が諸君を興奮させたのだろうか、次回冬季合宿は別府温泉で実施することとなった。

二〇二四年九月一八日・一九日の両日、本学附属図書館において、同館所蔵未整理古文書調査を実施した。参加者は、中世、近世、近現代ならびに博物館学の、学部学生と大学院生あわせて一七名であった。調査幹事は修士一年の佐々木美樹さんと、一九日には国立歴史民俗博物館の工藤航平先生、昭和女子大学の三野行徳先生が見学された。昨年度に引き続きの実施で、旧越後国高田藩土白石家に伝存した文書群の目録を作成した。参加者には、史料に向き合うよい経験になったと思料する。次回で目録の完成を目指す。

(文責：川口)

〈東洋史学研究室〉

本年一〇月現在、東洋史学研究室は、教員四名、大学院・博士課程七名、修士課程二年生二名、一年生三名、学部・四年生一〇名、三年生五名、二年生三名の、計三十四名で構成されている。

二〇一九年一月に太田敬子先生が急逝して以来、「西」担当教員は四年間にわたり一人欠員で、佐藤健太郎氏が孤軍奮闘状態であった。前号本欄で紹介したように、昨年度ようやく採用枠を与え

られ、その結果、公募を経て、オスマン朝史を専門とする末森晴賀氏が四月から講師として着任したことを、大変喜ばしいニュースとして報告したい。ここに研究室教員の三人体制は終了し、四人体制が始動したことになる。末森氏は、昨年度に博士学位を取得し、学振PDとして東京に赴いたばかりであったが、札幌を離れて一年での研究室復帰となった。本学教員として研究の順調な継続と発展がなされることを願うとともに、本学出身で北大生・院生側の事情に理解がある者として、研究室の今後の繫栄に大いに貢献してくれると期待したい。

その他のニュースとしては、院生として長年にわたり研究室に貢献してくれた坂東泰氏(二〇二二年度単位満了退学、現徳島県立鳥居龍藏記念博物館勤務)が九月に博士号を取得したことを特記しておく。現役院生たちがこれに続くことを願う。

本研究室関連としては、梅村尚樹氏が本学経済学部の松村史穂氏の協力も得て八月二十七・二十八日に「二〇二四年明清史夏合宿」を本学で開催し、本研究室の現役院生およびOB諸氏が各地で活躍する者たちも含め、多くの研究者たちの発表が行われ、盛会であった。

本研究室と海外との関係においては、台湾に半年私費留学、引き続き交換留学で国立政治大学に留学する学部生が現れ、喜ばしいことである。かつて本研究室で盛んであった中国への渡航や留学についても、来年度以後、まずは院生の国費留学から復調の兆しが現れるのではないかと見込んでいる。国際情勢のさらなる安定が望まれる。

(執筆担当：吉開)

〈西洋史学研究室〉

二〇二四年一〇月現在、西洋史学研究室に在籍する学生は、学部

二年生が一名、学部三年生が二名、卒業論文提出年次学生が一八名、修士課程八名、博士課程一名、という構成になっており、砂田徹、山本文彦、長谷川貴彦、松島明男、村田勝幸、安酸香織の六名（敬称略）が教育・指導と研究にあたっています。なお、山本先生は、理事・副学長として基本的に教育業務は担当せず、大学執行部の業務に専念されています。

昨年の研究室紹介文（担当は松島先生）に引き続き、今年も山本先生と西洋中世近世史に関して。ある意味で皮肉なことですが、山本先生が大学全体の管理運営に本格的に関わられるようになって以降、新たに西洋史学研究室の門を叩く学部二年生や修士課程入試受験者のなかで、西洋中世近世史を学びたいという学生がとくに増えているという印象を個人的にはもっています。今後も、山本先生が今年四月に出版された『神聖ローマ帝国』（中公新書）に触発されて、北大西洋史で学びたいと思う歴史研究者の卵が札幌を目指してやってくることでしょう。前述したような理由で山本先生の指導を仰げないこと知り、東の間落胆の様子を少しみせた学生もこれまでいりましたが、安酸先生の指導を受け、西洋中世近世史の魅力を再認識していったようです。安酸先生は二月に単著『ヨーロッパ史のなかのアルサス』を、そして六月に共訳書『ジャンヌ・ダルク』（ゲルト・クルマイヒ著）を発表され、西洋史学研究室に刺激を与え続けておられます。

また、所属教員によるそれ以外の研究成果の一部として、砂田先生が八月に訳書『ローマ建国以来の歴史七』（リウウィウス著）を、私村田が一月に『人種か、階級か』を超えて（ロビン・ケリー著）を公刊しております。コロナ禍で長らく途絶えていた海外渡航がやっと復活し、現地調査が生命線ともいえる外国史研究者にとっての「日常」が戻りつつあります。（物価高騰と円安により、科研費

の宿泊費レートと実勢レートの間に著しい乖離が生じているなどの問題はありますが。）

さて、本研究室で西洋古代史の研究と教育を長きにわたって率いてこられた砂田先生にとっては、今年度が最終年度となります。私自身、正直なところまだその実感はないのですが、「同僚」としての残りの時間を噛みしめて過ごしたいと思っています。

（文責：村田）

〈考古学研究室〉

二〇二三年度の考古学研究室の構成員は、教員三名（文学院に参加している他部局所属の教員を合わせると総数六名）、博士課程三名、修士課程五名、学部生八名の計一九名です。

昨年度で発掘が終了した豊浦町礼文華遺跡にかわって、札幌市内の丘珠縄文遺跡で野外実習を開始しました（二〇二四年八月二一日～九月一四日）。この遺跡は、ポランティアさんとともに継続的に学術調査が実施されてきている縄文文化晚期から続縄文文化の野営地で、札幌市教育委員会の全面的な支援のもと、発掘調査の技術習得だけでなく、調査成果の市民への還元も含めて授業のプログラムに含めることができました。お世話になりました札幌市教育委員会やポランティアの皆さんにお礼申し上げます。

また今年度は、永らくなかった考古学の集中講義が可能となったことから、福島大学から菊地芳朗先生をお招きしました。日常的に接している教員とはことなる研究者からの講義に、学生も大いに刺激を受けたようです。菊地先生にも、この場を借りてお礼申し上げます。

小杉教授は、二三年度九月の第十二シーズンの発掘調査をもって終了した、科研並びに考古学実習として実施してきた礼文華遺跡

(虻田郡豊浦町)の整理作業と発掘調査報告書の完成を目指して、孤軍奮闘残された在職期間の全精力を注ぎこんでいます。そんな中でも、二四年三月には「考古学研究室研究紀要」第三号を編集・発行できました。七月には恒例になった本会研究大会での退職予定教員の研究発表を行い、考古学研究に取り組んだ四五年間を振り返りました。十一月には、礼文華遺跡の報告・講演会を豊浦町で、札幌国際大学縄文世界遺産研究室主催の講演会で北海道の縄文世界遺産について、かつて設立記念講演をおこなった民間団体苫小牧縄文会会の二十周年記念講演会を苫小牧市で行い、それぞれ大学人・考古学者として関わってきた仕事のよい区切りとなりました。二四年度末の『研究室研究紀要』第四号の編集・発行をもって、考古学研究室での教育・研究を終えます。

高瀬教授は、昨年度から引き続き、ポーランドにおける新石器時代の黒曜石利用、植物利用についての調査を実施しました。海外での学会発表も再開し、ロシアへの訪問ができないことを除けば国外での研究活動はコロナ禍前とほぼ同じペースに戻りました。イギリスのエクセター大学ペンリンキャンパスで開催された第一〇回 Oceans Past Initiativeで現在実施中の科研費の成果を発表するとともに、ケンブリッジ大学で開催されたシンポジウム「The transition to agriculture at the edges of Eurasia: Neolithisation in the British Isles and the Jomon-Yayoi transition」でも発表を行いました。また、国内では湧別町川西オホホック遺跡で新たな学術調査を開始し、札幌、石狩、恵庭、岩手県などで文化財保護や史跡整備の委員も務めています。

國木田准教授は、二〇二〇年度から引き続き「土器の年代と使用法の化学的解明」(学術変革領域A)の研究プロジェクトを行っています。昨年度からは「生業動態からみた擦文文化の分布拡大要因」

(基盤研究B)を開始し、新たな分析装置を導入しました。また、国立歴史民俗博物館共同研究「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」も進めています。この他に、シブノツナイ堅穴住居群(湧別町)調査検討委員会への出席や、史跡大船遺跡(函館市)保存活用計画検討委員会の委員長を務めています。

今年の考古学研究室からは学部卒業生四名、修士二名、博士修士一名が巣立ちました。大学院への内部進学者はおりませんでした。他大学の大学院への進学、学芸員や一般企業への就職など、それぞれ希望の進路へと進みました。北大での経験をいかして、社会で活躍してくれることを期待しています。さらに嬉しいニュースとして、博士課程の許開軒氏が博士の学位を取得したのち、北大総合博物館で助教としての勤務を開始しました。今後の数年間、研究のさらなる深化と教育面でのキャリアを蓄積するための充実した期間になることを願っています。

(文責・高瀬)

